

試験研究成果普及情報

部門	漁場環境・生産基盤	対象	研究
課題名：東京湾におけるアマモ場の変遷			
<p>[要約] 東京湾のアマモの分布実態、過去からの変化を調べ、その要因を検討した。アマモは木更津沿岸から館山沿岸まで広く分布し、その面積は 1m² から 1ha 以上まで様々であった。富津港のアマモ分布は特徴があり、生育場所と非生育場所では波高の出現頻度が異なることが分かった。富津干潟のアマモ場面積は短期的に変化しており、流れ等の物理的な要因によるものと推測された。</p>			
フリーキーワード 東京湾、アマモ			
実施機関名	主 査	水産総合研究センター 東京湾漁業研究所 漁場環境研究室	
	協力機関	千葉大学大学院自然科学研究科 生命自然科学専攻 多様性生物学講座、港湾空港技術研究所	
実施期間	2004 年度～2007 年度		

[目的及び背景]

東京湾では、かつて広い範囲にアマモ場が存在し、魚介類の産卵場所や稚魚の保育場などとして水産資源の維持に重要な役割を果たしていたと言われている。近年、沿岸部の開発が進むことにより多くのアマモ場が消失している。そこで、アマモ場の再生を目的とし、東京湾におけるアマモの分布実態と過去からの変化を調べ、その要因について検討した。

[成果内容]

1. 東京湾のアマモ分布を調査したところ、木更津沿岸から館山沿岸まで広く分布し、その数は 42 箇所であった (図 1)。
2. 確認されたアマモ場の面積は、1m² 程度のものから 1ha 以上まで様々であり、最大のは富津干潟内のアマモ場 (175ha) であった。
3. 富津干潟において、1967 年から 2003 年までのアマモ場面積変化を航空写真により解析したところ、1967 年から 1986 年の間及び 1986 年以降に変化があり、1986 年までの変化は埋め立てに伴って生じ、1986 年以降の変化は海岸線と砂洲の距離と関係して生じていることから、面積変動は流れ等の物理的な要因によって起こると推測された (図 2)。
4. 富津港においてアマモ分布を調べたところ、生育場所と非生育場所では波高出現頻度が異なり、非生育場所は 20 センチ以上の波の出現頻度の高い場所であった (図 3)。

[留意事項]

[普及対象地域]

東京湾

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

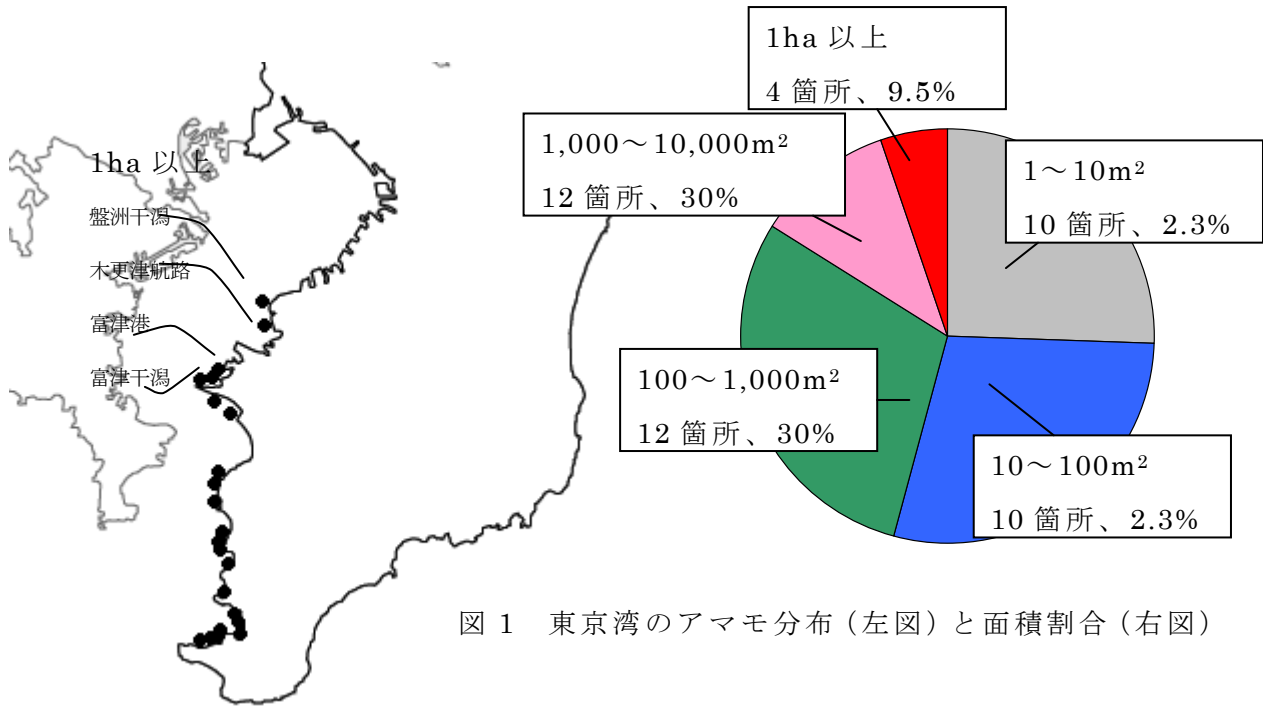


図1 東京湾のアマモ分布 (左図) と面積割合 (右図)

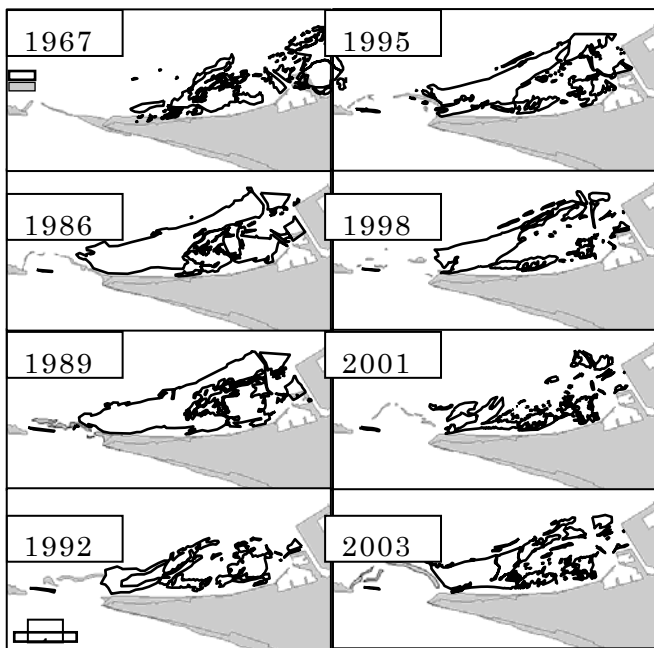


図2 富津干潟のアマモ場と砂洲の位置
(□:アマモ場 ■:砂洲)

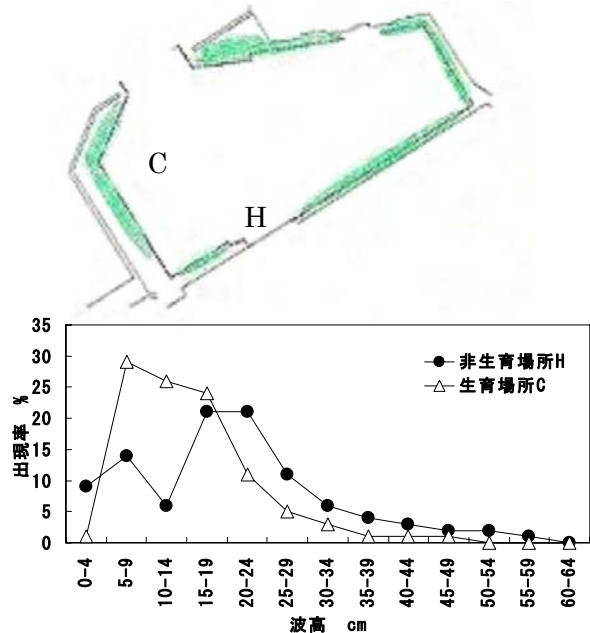


図3 富津港のアマモ分布 (上図) と波高出現頻度 (下図)

[発表及び関連文献]

- ・千葉県沿岸海域におけるアマモの分布, 千葉県水産研究センター研究報告, 第3号, 2004年
 - ・東京湾富津干潟における海草藻場の長期空間動態, 保全生態学研究, 10巻, 2005年
- [その他]